

石 原 後 遺 跡

1995年3月

総社市教育委員会

序

私たちのふるさと総社平野は、高梁川の清流に育まれ、温暖な気候と先人のたゆまざる努力によってもたらされた豊かな生産力により、吉備とよばれる一大勢力の中枢地となり、古くから日本の歴史を語る上で欠くことのできない貴重な文化財の宝庫であったことが広く知られています。これらの文化財のひとつひとつは、かけがえのない財産であり、これらを後世に守り伝えることは現在生きている私たちに課せられた重要な責務であります。

このたび、総社市中心部の中央文化筋整備の一環として、中央文化筋公園の建設が計画され、これに伴う予定地内の埋蔵文化財については、関係各位のご理解ご協力を賜り、変貌の著しい総社市街地において貴重な遺跡の存在していることが解明されました。

今後とも、文化財の保護保存と開発との調和をはかり、また遺跡の発掘の成果を現代に活かすべく努力をいたす所存でありますので、さらに一層のご理解とご協力をいただきますようお願い申しあげます。

平成7年3月

総社市教育委員会

教育長 浅沼 力

例　　言

1. 本書は、総社市教育委員会が平成3年度に発掘調査を実施した「石原後遺跡」の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、総社市教育委員会社会教育課（当時）　高田明人が担当した。
3. 出土品の整理は、総社市南溝手265-3　総社市埋蔵文化財学習の館にて行い、報告書作成後は同所に保管している。
4. 本報告書は、第3章第3節を総社市教育委員会文化財室　武田恭彰・平井典子、第3章第5節を武田、その他を高田が執筆し、高田が編集した。
5. 遺物の実測・浄写は武田が、遺構の浄写は高田が行った。
6. 遺物写真の撮影は、武田が行った。
7. 出土遺物の整理、報告書の作成にあたっては、西平登代子・近藤雅子（総社市埋蔵文化財学習の館）の協力を得た。
8. 本報告書の高度値は海拔高であり、遺構実測図の方位は磁北である。
9. 本報告書に使用した地形図は、総社市発行のものを複製したものである。
10. 本報告書に関係する遺物実測図・写真等は、総社市埋蔵文化財学習の館に保管している。
11. 発掘調査から報告書作成にあたっては、多くの研究者の方々から教示を得た。謝意を表する次第である。

目 次

序 文

例 言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 発掘調査の経過	1
第3節 調査の体制	3
第2章 地理的歴史的環境	4
第3章 発掘調査の概要	6
第1節 弥生・古墳時代の遺構	7
(1) 溝-4	7
(2) 溝-5	7
第2節 中世の遺構	8
(1) 溝-1	8
(2) 溝-2	8
(3) 溝-3	8
(4) 溝-6	8
(5) 土壙-1	9
(6) 土壙-2	9
(7) 土壙-3	10
(8) 柱穴列	10
第3節 出土遺物	10
(1) 弥生・古墳時代の遺物	10
(2) 中世の遺物	15
第4節 ま と め	22
第5節 石原後遺跡出土の土器器類について	24

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置 (S=1/1,600,000)	1
第2図 遺跡周辺地形図 (S=1/5,000)	2
第3図 調査範囲 (S=1/400)	2
第4図 周辺遺跡分布図 (S=1/30,000)	5
第5図 遺構配置図 (S=1/160)	6
第6図 溝-4 土層断面図 (S=1/40)	7
第7図 溝-5 土層断面図 (S=1/40)	7
第8図 溝-1 土層断面図 (S=1/40)	8
第9図 溝-6 土層断面図 (S=1/40)	9
第10図 土壌-1 土層断面図 (S=1/40)	9
第11図 溝-4・5 出土遺物実測図1 (S=1/4)	11
第12図 溝-4・5 出土遺物実測図2 (S=1/4)	12
第13図 溝-4・5 出土遺物実測図3 (S=1/4)	13
第14図 溝-4・5 出土遺物実測図4 (S=1/4)	14
第15図 中世出土遺物実測図1 (S=1/4)	16
第16図 中世出土遺物実測図2 (S=1/4)	17
第17図 中世出土遺物実測図3 (S=1/4)	18
第18図 中世出土遺物実測図4 (S=1/4)	19
第19図 中世出土遺物実測図5 (S=1/4)	20
第20図 土師器柄底部拓本 (S=1/2)	28
第21図 備中南部土師器縞年式案 (供膳具は1/6, 煮沸具は1/10)	29
第22図 備中南部土師器縞年式案 (供膳具は1/6, 煮沸具は1/10)	30

図 版 目 次

図版1 1. 石原後遺跡近景 (調査前・南から)	2. 石原後遺跡近景 (調査後・南から)
図版2 1. 調査区全景 (北西から)	2. 調査区全景 (北東から)
図版3 1. 溝-4 遺物出土状況 (南から)	2. 柱穴列等検出状況 (北から)
図版4 1. 溝-5 遺物出土状況 (東から)	2. 溝-5 土層断面
図版5 1. 溝-1 遺物出土状況 (東から)	2. 溝-1 土層断面
図版6 1. 土壌-1 検出状況 (北西から)	2. 土壌-1 遺物出土状況 (北から)
図版7 中世出土遺物1	
図版8 中世出土遺物2	

第1章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経緯

石原後遺跡は、総社市溝口587番地に所在する。

この周辺は、かつては水田地帯であったが、昭和40年代に市庁舎が現在の位置に移り、駅前地区的区画整理事業や中央区画整理事業などの都市計画事業の進展により、現在では住宅などを中心にして市街化が著しい。この遺跡の東及び南の道路は、それぞれ中央文化筋・常盤通りという愛称がつけられ、中央文化筋には図書館・総合文化センター・武道館などの施設が配置され、またカミガツジプラザが市政30周年を記念して整備されている。昭和60年には文化筋の整備構想が示され、そのなかでポケットパークの設置が提案されていた。平成3年には、中央文化筋の拠点として山・水・街のゾーンからなる親水公園として整備されることが決定した。当該地は、平成2年度に用地の取得がなされたので、これまでこの付近は埋蔵文化財の存在は知られていなかったが、中央土地区画整理事業に伴って発掘調査がなされた真壁遺跡に関連する遺跡の存在が考えられるので、平成3年3月13・14日にバックホウを使用して確認調査を実施した。その結果、用地の一部に中世の遺構遺物などが存在することが確認された。この遺跡の取扱について、担当の都市計画課と協議を重ねたが、この公園の整備にあたっては、大規模な噴水を中心とする親水施設などがメインになり、現在の道路面までの造成を加味しても地面の掘削が遺構面よりも深くまで及ぶのが避けられないことが判明したので、工事に先行して平成3年度事業として発掘調査を実施することとした。



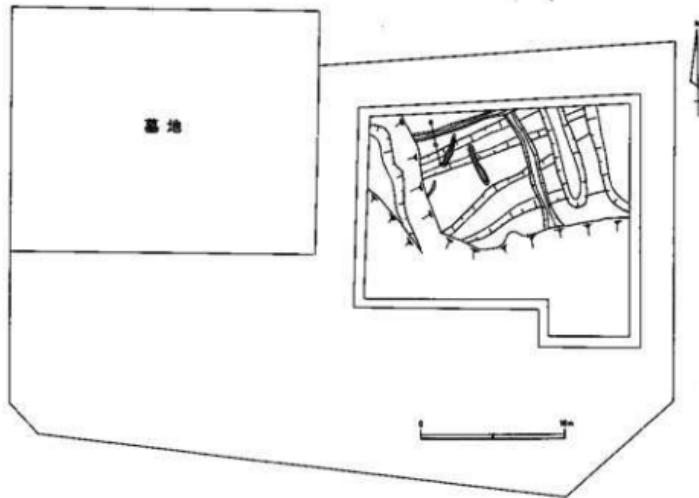
第1図 遺跡の位置

第2節 発掘調査の経過

平成3年4月30日付け都第50号で総社市長から文化財保護法第57条第3項による埋蔵文化財発掘通知が提出され、これに対し平成3年5月20日付け教文埋第1263号で県教育庁から発掘調査の指示があった。これをうけて平成3年6月1日付け総市教委社第97号で文化財保護法第98条第2項による埋蔵文化財発掘通知を提出し、平成3年6月11日発掘調査に着手した。



第2図 道路周辺地形図 ($S=1/5,000$)



第3図 調査範囲 ($S=1/400$)

日誌抄 平成3(1991)年

- 6月11日 調査開始。重機による表土剥ぎ。
- 6月12日 調査区西端に側溝を設定し掘り下げる。遺物は遺構の存在する北端近くに限られる。
- 6月13日 調査区南端に側溝を設定する。砂層である。
- 6月14日 調査区東端に側溝を設定する。遺物が多數出土する。
- 6月15日 東半部で遺構検出作業。中世の土壤と弥生時代の溝が切り合うらしい。
- 6月18日 北側に側溝を設定する。続いて東寄りの溝-1・溝-2を掘り下げる。
- 6月19日 溝-1の黒色土層から土師器が出土する。
- 6月21日 溝-1・土壤-1の遺物出土状況を撮影。
- 6月24日 土壤-1の掘り下げ。
- 6月25日 北半部の遺構検出。中世の溝・土壤がある。
- 6月26日 溝-6の掘り下げ。
- 6月27日 弥生時代の溝を検出。
- 6月28日 排水作業を行うが降雨。
- 6月29日 弥生時代の溝を掘り下げ。古墳時代の溝を検出。
- 7月2日 古墳時代の溝を西側から掘り下げる。東半部遺構検出状況を平板測量。
- 7月3日 西半部遺構検出状況を平板測量。古墳時代の溝検出状況撮影。
- 7月6日 遺構検出状況撮影。
- 7月13日 重機による埋め戻し。

第3節 調査の体制

調査組織

総社市教育委員会

教育長 浅沼 力 教育次長 秋山 昇

社会教育課（文化係）

課長 橋口文男 主任 荒木泰行（庶務）

主幹 村上幸雄 主任 高田明人（調査）

係長 森田忠志

作業員

赤木 清 秋山哲夫 吉田好宗 岸本憲子 清水澄子 高本邸子 西村章子
藤原澄子 前田節子 吉田時子 吉田年子

第2章 地理的歴史的環境

石原後遺跡は、総社平野の中ほどに位置する。総社市は、古代吉備の中枢にあって、まさに歴史の宝庫といって過言ではない。吉備高原の南端に位置する標高400m級の山塊に囲まれるこの総社平野は、とくに弥生時代以降多数の遺跡が残された。その中で古墳や寺院跡について⁽¹⁾は、早くから注意がはらわれ、佐野山古墳・隨庵古墳は比較的早い時期の調査例である。また、宮山墳墓群や立坂墳丘墓など、特殊器台を出土する墳墓遺跡の発掘は、古墳の発生の謎を解く重要な成果をもたらした。その後、備中國分寺周辺などでは吉備路風土記の丘の整備に伴って一部発掘調査が行われたものの、大規模な開発がなかったこともあり、とくに沖積地での発掘調査はほとんど皆無の状態が続いている。しかし、昭和55年3月に、中央土地区画整理事業の工事中に真壁遺跡で住居址などが発見されたことを直接の契機として、昭和55年6月、総社市教育委員会社会教育課に文化係が新設され、埋蔵文化財の発掘調査業務を行う体制が整⁽²⁾えられた。真壁遺跡は、縄文時代から室町時代までにわたる時期のおもに集落関係の遺跡であるが、調査対象が道路部分が大半であり、全体像についてはなお不明な点が多い。その後昭和63年には職業安定所（現ハローワーク総社）建設に伴う発掘調査が行われている。現在大字真壁と称される地名は、JR伯備線の西から東に向かって東西約2kmのひろがりがある。これは、古く高梁川が東流していた時期にこれに平行して形成された、河岸段丘状の微高地を単位として名付けられた地名であろう。真壁遺跡では、現在の水田層の直下から、縄文時代から室町時代までの遺構・遺物が検出されることからみれば、この微高地は上部をかなり削平されていることが予想される。縄文時代の遺構は、貯蔵穴や土器を用いた埋葬施設と考えられるものが認められたにとどまり、遺物も量的に乏しい。弥生時代の遺構・遺物は、前期のものが若干知られ、また後期以降古墳時代前半にかけての資料が多いが、基本的には広い範囲に住居が散在するという景観を想定しうる程度である。古墳時代後半から古代にかけての資料は全体からみれば少ない。飛鳥京跡出土木簡の白髮部五十戸の白髮部を真壁に比定する見解も示されたが、飛鳥時代の遺構・遺物の出土を見ないため真壁郷の位置については、いまだ解明されていないのが実情である。中世以降は、12~13世紀頃の建物や土壙墓があつたほか、16世紀頃の溝で区画される館跡と考えられるものもあるが、詳しい状況についてはわからない。近隣で古代・中世の遺構・遺物を豊富に出土した例としては、樅本遺跡をあげることができる。樅本遺跡では、鎌倉から室町時代の鍛冶関係の遺構が知られている。さらに、備中國府は、伝承地はあるが、いまだ確定にいたっていないなど、今後解明されなければならない問題が多い。鎌倉時代以降は、備中福山城をめぐる攻防や、東福寺領であった上原郷など、文献上には特記されることがらがあるが、現状ではこれらを論じるに足るほどの埋蔵文化財の発掘成果の蓄積がすす



第4図 周辺遺跡分布図 (S = 1/30,000)

んでいないのが実情である。

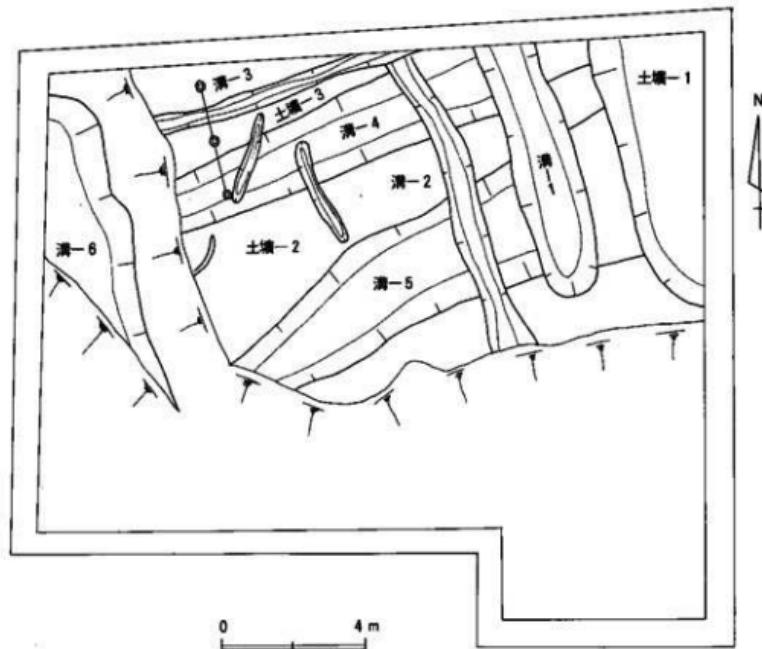
総社市の現在の姿は、市街地を除けば、周辺部にはまだ多くの水田や畠が残り、住宅地と農地が相半ばしているというのが基本的な景観といえるだろう。しかし、市街地の周辺部では、区画整理がすすみ、市内の工場への就労者や県立大学の学生などを中心とした住民の増加傾向に対応してアパートの建築が目立つなど、一部地域では急激に都市化に向かって変貌を遂げつつあるところもある。また、周辺部では場整備がかなり広範囲にすすめられており、昔ながらの農村の景観は次第に過去のものになっているのは確かである。

註

- 註1 近藤義郎「佐野山古墳」「総社市史」考古資料編 総社市 1987
　　鈴木義昌・岡壁忠彦・岡壁義子「隨庵古墳」1966
- 註2 高橋謙「宮山墳丘墓」「総社市史」考古資料編 総社市 1987
　　近藤義郎「立板墳丘墓」「総社市史」考古資料編 総社市 1987
- 註3 「真壁遺跡」「総社市史」考古資料編に成果の一部が掲載されている。報告書未刊
- 註4 高畠知功・平井泰男ほか「橋本遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」65 岡山県教育委員会 1987
- 註5 「橋本遺跡緊急調査概要」「総社市埋蔵文化財発掘調査報告」7 総社市教育委員会 1989

第3章 発掘調査の概要

発掘調査は、確認調査の結果を参考にして遺構の分布する北半部を重点的に行った。調査区南半部は表土直下で砂利混じりの円礫層となり、深さ3m以上にわたって同じ状況が認められていた。この層からは、中世の土器片が若干認められることから主要な遺構の残された時期からあまり時間を置かないうちに大規模な洪水に見舞われたものと考えられる。調査の実施にあたっては、まず全域の表土を除去し、遺構の分布状況をあらかじめ確認したうえで遺構のない部分に堆土を堆積するという方法をとった。したがって調査対象面積1000m²に対して実質的に調査を行った範囲は300m²である。遺構の時期は弥生時代後期から一部古墳時代のものもあるが、主体となるのは中世（おおむね13世紀ごろ）のものである。



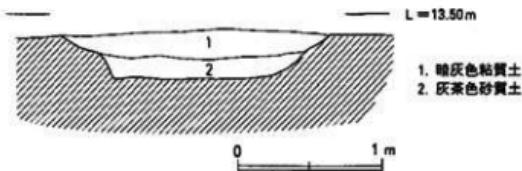
第5図 遺構配置図 (S=1/160)

第1節 弥生・古墳時代の遺構

(1) 溝-4

調査区北東隅から西にのびる。幅約1.8m、深さ30cmをはかる。埋積土は上層が暗灰色粘質土で弥生土器片を少量出土した。下層は灰茶色の砂層で遺物を伴わない。底面は平坦で、基盤層は一部で円礫を含むじやり層となる。

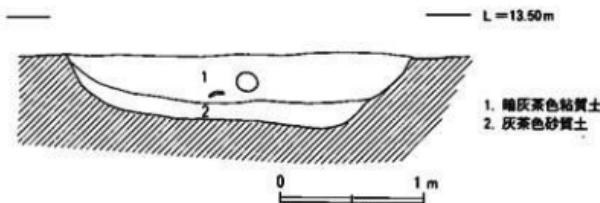
遺物は弥生土器片のみで、後期中葉の時期と考えられる。



第6図 溝-4 土層断面図 (S=1/40)

(2) 溝-5

調査範囲のはば中央を東西にのびる。幅2.5m、深さ50cmをはかる、やや幅の広い溝で断面形は皿状を呈する。上層は暗灰茶色粘質土で土器器が多数出土した。比較的完形品が多い。下層は溝-5と同様の灰茶色の砂層である。遺物は溝の廃絶後に廃棄されたと考えられる。時期は古墳時代の前期である。

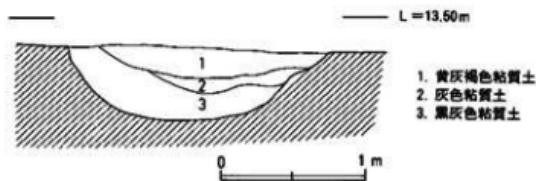


第7図 溝-5 土層断面図 (S=1/40)

第2節 中世の遺構

(1) 溝-1

調査区の東寄りで検出された。長さ7m・幅1.5m・深さ50cmほどで南端は丸く途切れる。上層は黄灰褐色粘質土で灰色や黄色のブロックを含む。溝の廃絶後に造成を行ったものと思われる。中層は灰色粘質土、下層は黒灰色粘質土で、下層は木炭の細片をまじえる。遺物は下層の下部から出土し、完形品が多いのが特徴である。



第8図 溝-1 土層断面図 ($S=1/40$)

(2) 溝-2

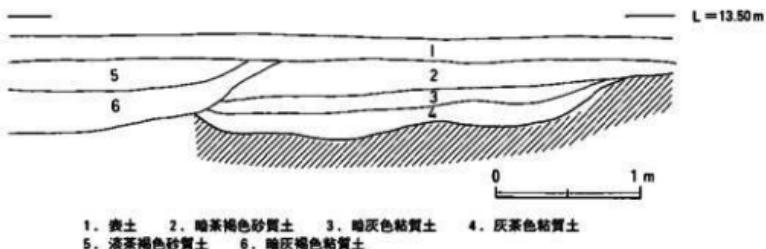
溝-1の西に平行して検出された。北端は溝-3によって切られ、また南端は砂利層で切られるため約6mほどしか残らない。幅は50~90cm・深さは10cmである。出土遺物は、ごくわずかであるが、溝-1と同じ時期のものと思われる。

(3) 溝-3

調査区の北西部で検出された。長さ6mほどが残存したにとどまる。幅50~60cm・深さ50cmの規模である。埋土は灰色で一層である。出土遺物は僅少である。

(4) 溝-6

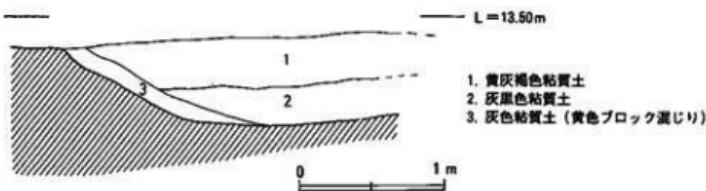
調査区の北西隅で検出された。土層断面図に示したとおり、洪水などの理由によって削り取られた部分の上面に浅い窪み状に認められた。



第9図 溝-6 土層断面図 ($S=1/40$)

(5) 土壌-1

調査区の東端で検出された。溝-1に平行する。調査区内では完結しないが、東西3.5m・南北8m以上の規模である。深さは60cmをはかる。3層からなり、下層の灰色粘質土の下部から遺物が出土した。上層は溝-1と同様に造成土とみられる。



第10図 土壌-1 土層断面図 ($S=1/40$)

(6) 土壌-2

溝-4の上面に一部重複して検出された。深さはわずか5cmほどでほとんど痕跡を残すことどまる。さらに南に連続して浅い窪みが認められるから、本来溝状であった可能性もある。出土遺物はない。

(7) 土壌-3

溝-2に平行する。長さ3m・幅30~50cm・深さは15cmほどの規模で、本来溝の一部であった可能性もある。出土遺物はない。

(8) 柱穴列

調査区の西寄りで3個が検出された。西または北にさらにひろがる可能性もある。柱痕の直径はいずれも約20cm・深さは10cmほどの規模である。埋積土は土壌-2などと同様であるから時期もさほど隔たらないものであろう。

第3節 出土遺物

(1) 弥生・古墳時代の遺物

本遺跡では、溝の覆土中より縄文時代晩期から古墳時代初頭の土器がコンテナ27箱分出土しているが、そのほとんどが弥生時代後期から古墳時代初頭に属するものである。以下主なものを図示し、若干の説明を加える。

縄文時代晩期の土器（1）は1点のみ出土している。口縁部に山形の小突起が付き、内外面に条痕調整を施し、内面はその後ナデている。突帯文出現前の土器である。

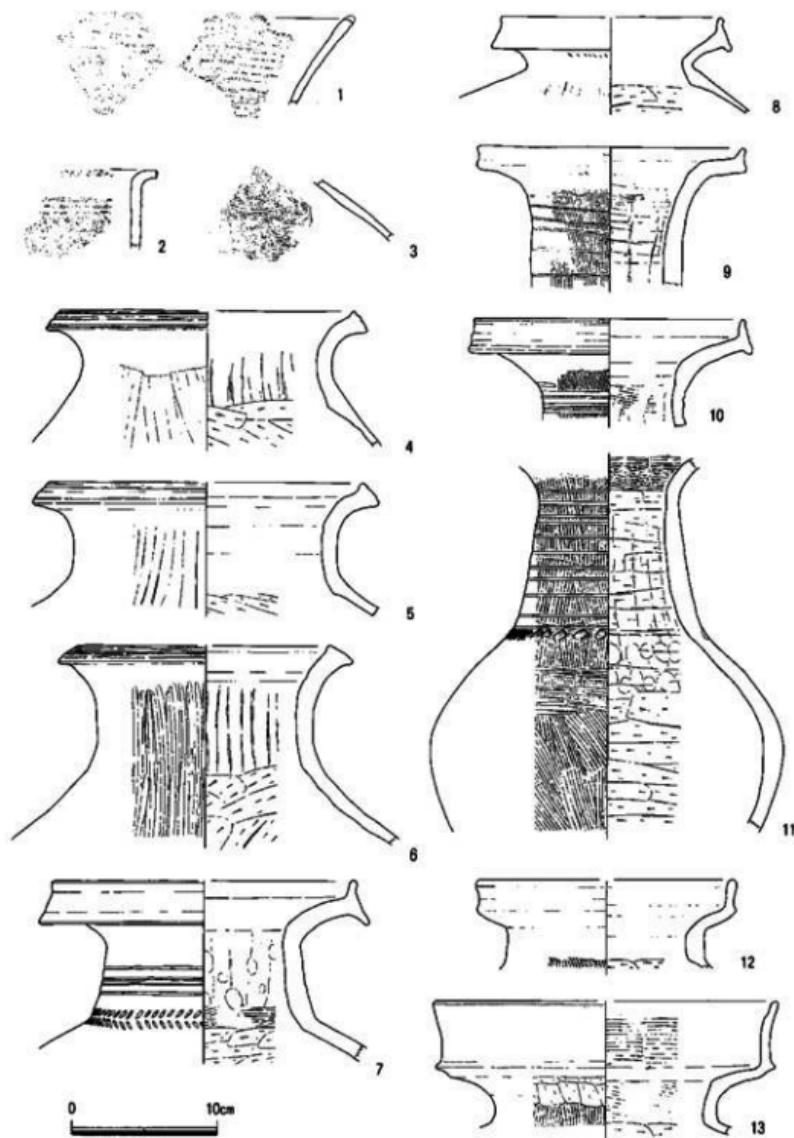
弥生時代前期の土器としては、頸部に2条の沈線を有する中段階の壺の破片（2）が1点見られる。その他小片で図示できなかったが、沈線が多条化する新段階の壺や壺の破片が数片出土している。

3は、弥生時代中期の土器である。壺の胴部に描绘沈線文による装飾を行っている。

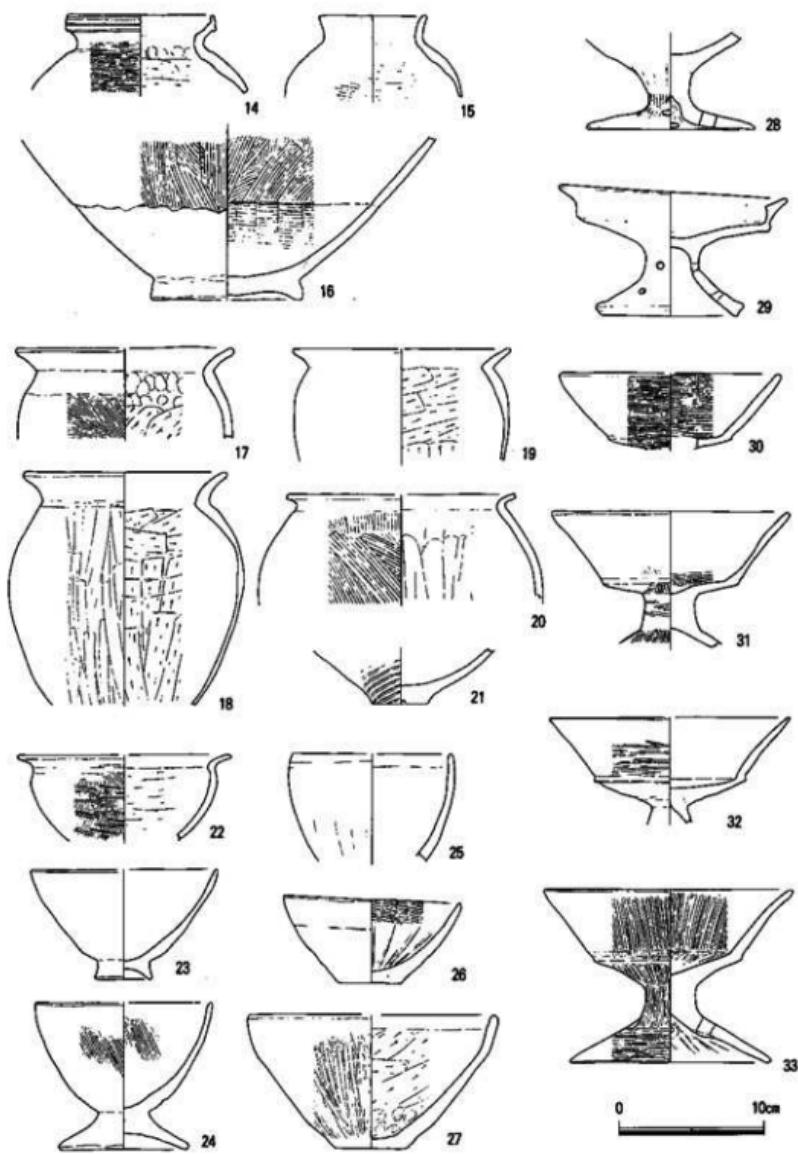
弥生時代後期の土器のうち、壺（4~16）は、4~6が後期前半、7~11・14・15が後期後半、12・13が後期末に属するものと思われる。7の胎土は特殊器台・特殊壺に類似し、外面には赤色顔料による彩色を施している。底部16は継ぎ目が明瞭に残り、調整は継ぎ目を境に、外面下がナデ、上がハケメ、内面下が横方向、上が縱方向のハケメを施す。吉備では見られない土器で、底部の形態や継ぎ目の残り方等からV様式初頭あるいはIV様式までさかのぼる儀内からの搬入品、もしくはその影響のもとに作られた可能性が高いものと思われる。

壺（17~21）は、後期後半にしては二重口縁のものはほとんどなく、「く」の字状の口縁をもつものが主流となっている。21は儀内からの搬入品の可能性が高い。

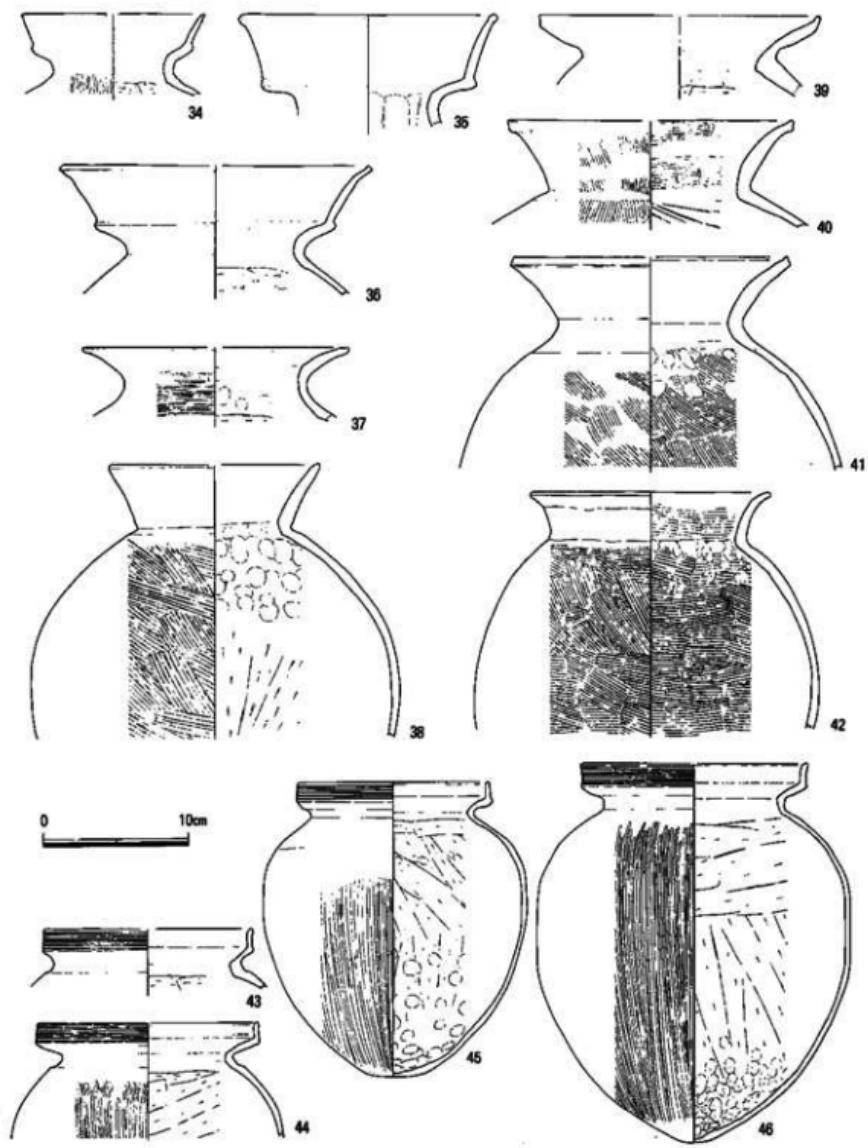
鉢（22~27）はいずれも後期末で、23~27は同様の形態が古墳時代まで続いたため、その時期



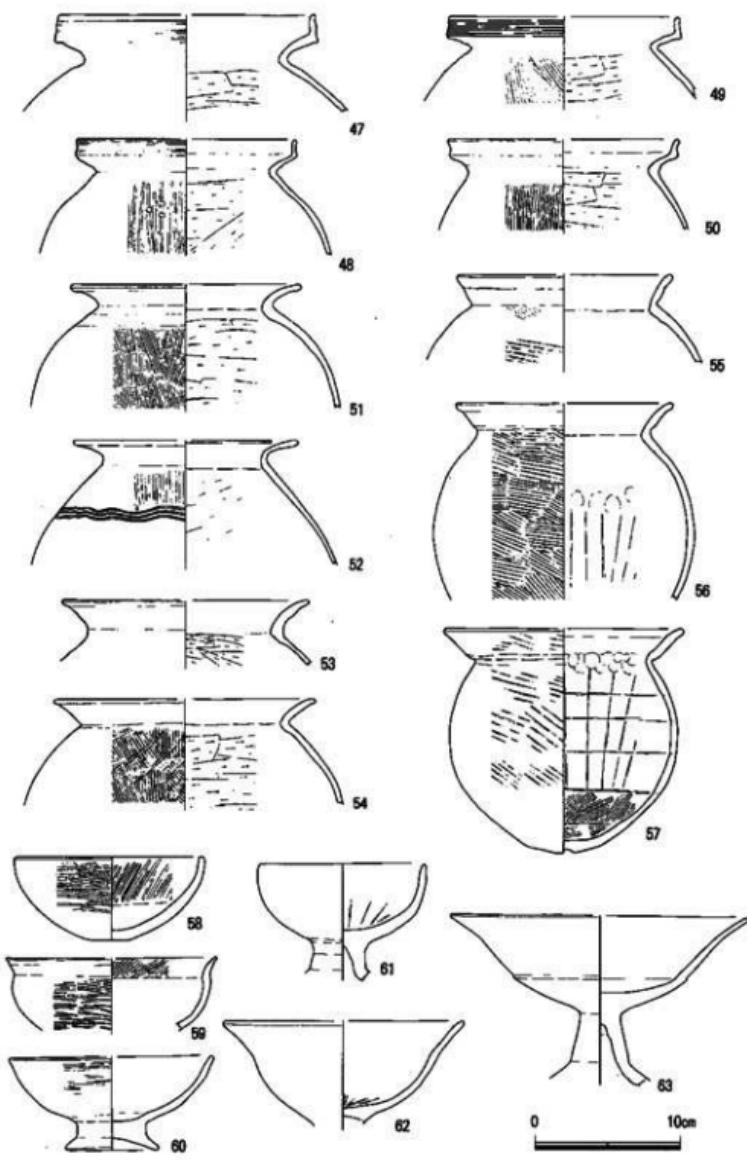
第11図 淸一4・5出土遺物実測図1 (S = 1/4)



第12図 溝一4・5出土遺物実測図2 (S = 1/4)



第13図 溝-4・5出土遺物実測図3 (S = 1/4)



第14図 満-4・5出土遺物実測図4 ($S = 1/4$)

まで下がる可能性もある。

高杯（28～33）は、29が後期前半、他はすべて後期末である。33は、この形態ではめずらしく口縁部内外面を縱方向にヘラミガキしている。また31も、口縁部外面を縱方向のハケメ調整後縱方向のヘラミガキを施している。

古墳時代初頭としては、35～63の土器があげられる。34～42は壺である。42は、この地域ではあまり見られないもので、肩部の張りは少ない。内外面にハケメ調整を施す。

壺（43～57）は、二重口縁をもち、口縁外面に櫛描沈線文を施す「吉備型壺」と「く」の字状の口縁をもつものとに分かれる。50は、口縁部外面をヨコナデで仕上げている。52は肩部上方に櫛描波状文をもつ。54～57は外面にタタキがみられ、54はその後ハケメ調整を行っている。

鉢（58～60）のうち、60は山陰の影響を受けたものと考えられる。

高杯（61～63）のうち、61は他の土器と比べ色調は乳褐色を呈し、胎土も粗い砂粒を多く含むことから、搬入品の可能性もある。内外面には赤色顔料を塗布している。

（平井）

（2）中世の遺物

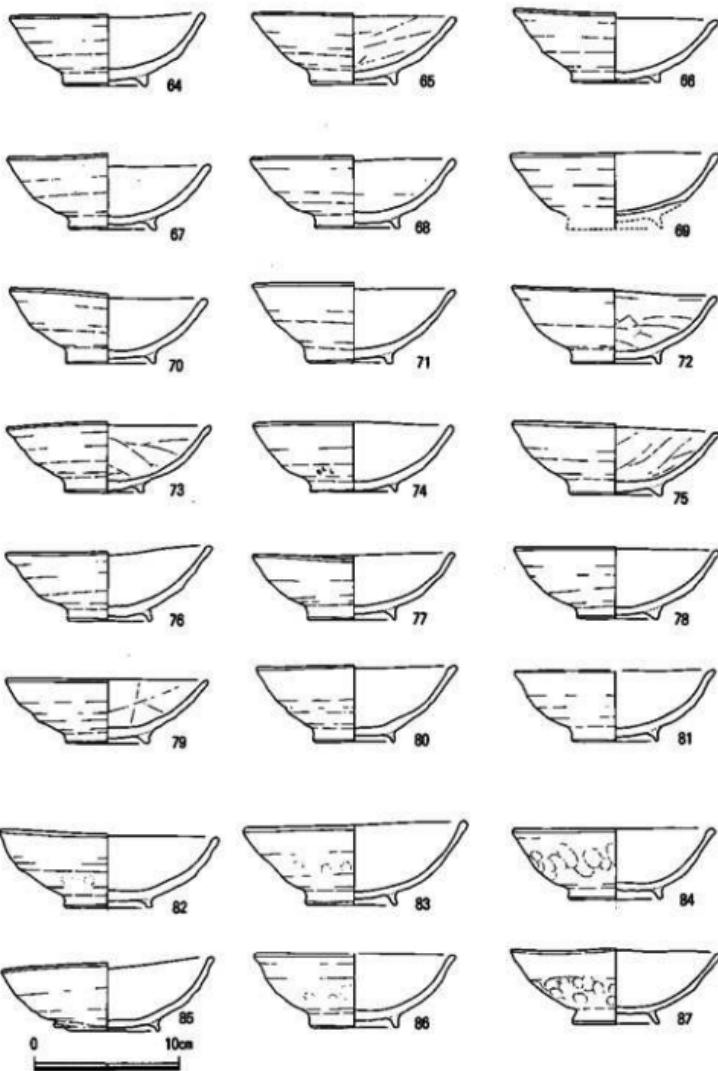
図15～19の64から191の土師器椀・壺・皿・鍋・鉢・輸入陶磁器などの中世土器の大半は溝-1と土壤-1から出土したが、両者のかなりの個体に接合関係が見られることから、同時期に使用されて廃棄された一括資料と考えられる。

今回の調査では整理用コンテナで16箱分の中世土器が出土したが、大半は土師器椀と皿であるが、細片が多いため、個体数は不正確ながら、椀が300個を越えるのは確実である。

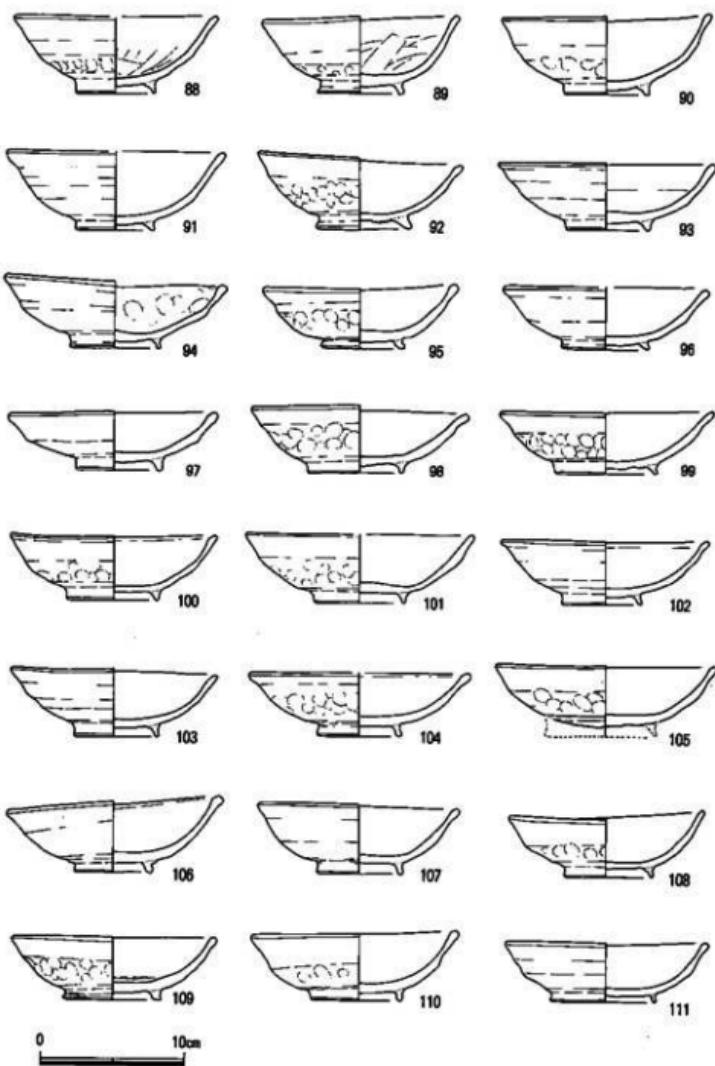
まず、土師器椀（64～111）は、その特色から口径14cm前後で、ぶい黄白色を呈する一群と、それ以外のものに大別できる。前者は焼成がすべて軟質で、胎土が緻密であるとともに外面はやや緩いヨコナデのみで指頭圧痕は見られない。内面はヘラ状の工具で平滑にナデられている個体が多く、高台は断面が三角形や四角の低いものが多いのが特色である。また、口縁端部を三角形に肥厚する傾向があり、外面のヨコナデとともに、通常の土師器椀には見られない特徴を呈している。また、74の外面には刃が付着した痕跡があり、73のようにヘラ状工具のナデが深すぎて器面に穴があいたままで、器としての機能が疑問視されるものもある。

後者の椀（62～111）は、口径が14から15cmであるが、深さが浅いものと深いものがある。いずれも焼成は硬質で白色のものが多く、外面の下半に指頭圧痕が見られる。また、胎土は砂粒を多く含むものが大半で前者とは対照的である。そして、図20のように底部に壺や皿等に見られるような板状の圧痕のつくものもある。

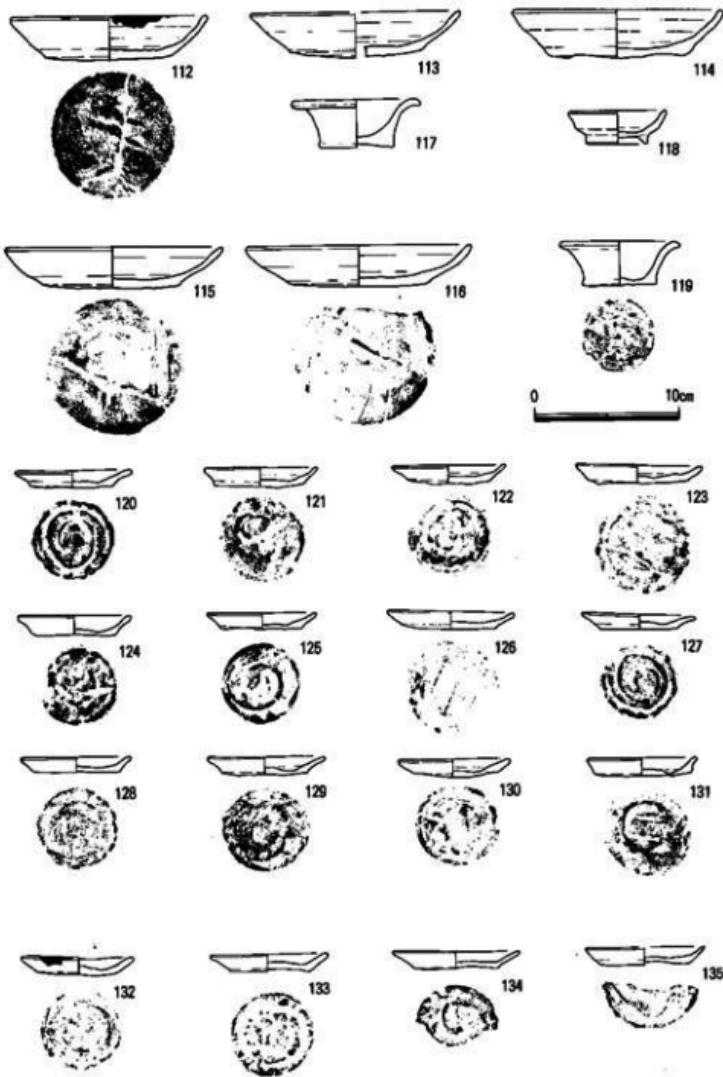
壺（112～116）は113のみが淡橙色で、他は椀と同様の焼成で白色を呈している。いずれも



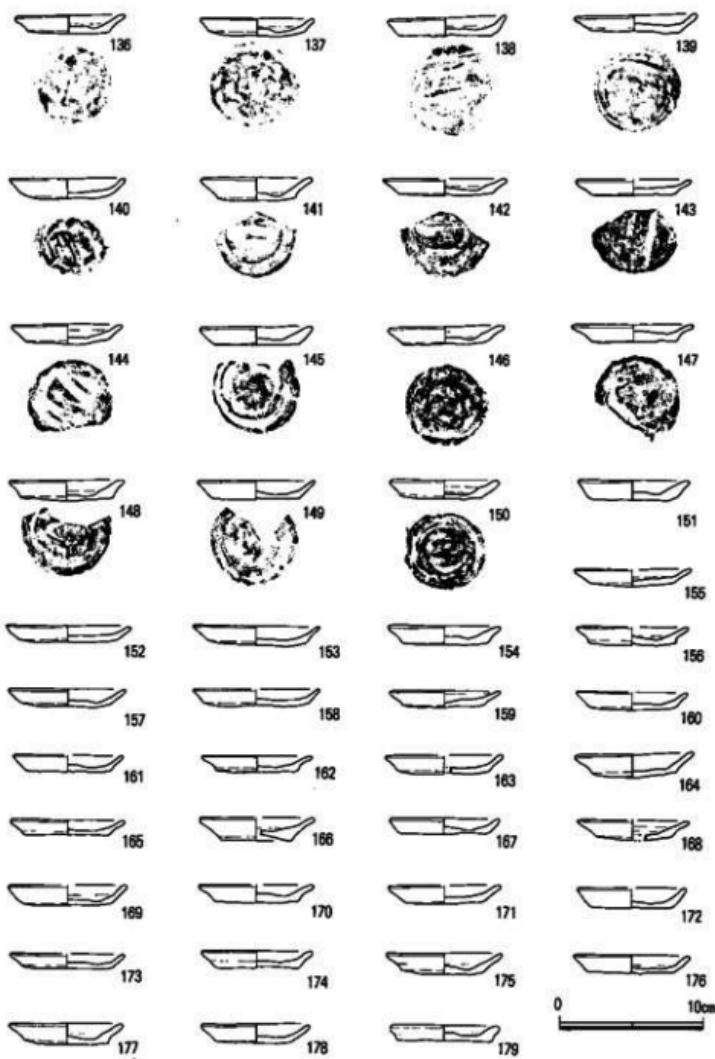
第15図 中世出土遺物実測図1 (S = 1/4)



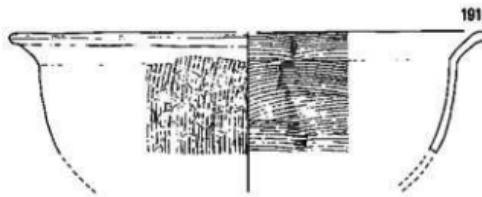
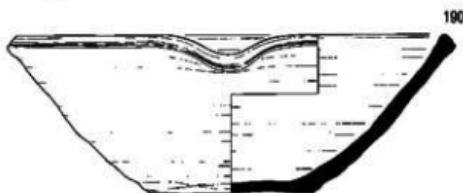
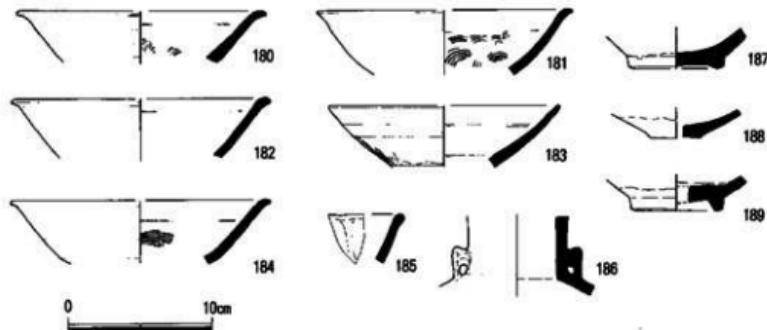
第16図 中世出土遺物実測図2 (S = 1 / 4)



第17図 中世出土遺物実測図 3 (S = 1 / 4)



第18図 中世出土遺物実測図4 (S = 1 / 4)



第19図 中世出土遺物実測図 5 (S = 1/4)

底部はヘラ切りの後に板状の圧痕がつく。壺は破片になったものも少なく、図示できた点数がほぼ実数であり、全体からみれば非常に微々たる個体数である。

脚台・小椀（117～119）は椀と同様の胎土と焼成で、底部は皿とよく似たヘラ切り未調整である。これらも他に破片もなく、元来極く少量しか存在していなかったと思われる。

皿（120～179）は、口径がほぼ8cm前後であるが、焼成・色調・形態・技法にかなり差がある。このうち、底部のヘラ切り後に板状の圧痕が付くものは、形態が壺に似ている傾向があるものの、一定ではない。また、ヘラ切りの形状にも癖が見られ、未調整とナデを加えるものがあるが、他の要素との相関関係に一定の規則性を見いだすことはできない。

鉢（190）は、須恵質で東播産と考えられ、使用による磨滅が顕著に見られる。

鍋（191）も非常に少なく、数個体が確認されたのみであるが、いずれもスヌなどの付着は見られず、やや器壁が厚い傾向がある。

輸入陶磁器（180～189）は、白磁・青磁の椀・皿が少量出土したが、186の白磁壺は市内の他の遺跡では確認されていない。

（武田）

第4節 まとめ

今回の調査においては、これまで述べてきたとおり、弥生・古墳時代及び中世の遺構が検出された。遺構は、溝や土壌のみで、集落の縁辺部であったと考えられるものの、集落の中心をどこに求めるかに関しては周辺の調査例に乏しいため具体的に示すことは困難である。なお、これまでの真壁遺跡における集落のありかたを見れば、狭い範囲における重層関係は顕著でなく、むしろ広い範囲にゆるやかな面として各時代の遺構が散在しているという状況を指摘しうる。その中でも、とくに中世の遺構は微高地の比較的低位部寄りに分布することも少なからず認められるから、当該地は中世の段階になってようやく生活の中心地に接近したということが可能かもしれない。今回の調査範囲内の南及び西側では洪水の影響と考えられる砂礫の堆積があり、これがこの遺跡のピークの時期と相前後して起ったらしい点に注意が必要である。さらにこの遺構に痕跡をとどめる洪水の跡は、比較的短時間の間に少なくとも2回以上想定できる。溝-6を切る粘質土の落ち込みがこの遺跡で見られる最後の洪水の痕跡と考えられる。

遺物のなかには、縄文時代晩期及び弥生時代前期のものも、ごく少量であるが知られた。これらは弥生時代後期に廃絶された溝の埋土から出土したが、真壁遺跡⁽¹⁾では縄文時代早期及び後・晩期が、また鷺本遺跡⁽²⁾では中期の土器を出土した。集落の具体的なありかたを示す資料には恵まれていないが、晩期後半ごろになると、貯蔵穴や土器棺と考えられる遺構も知られるようになり、人々の活動が活発になっていくようすを示しているとみられる。

弥生時代の溝-4及び古墳時代の溝-5は東西方向に走る。調査範囲内では溝のみの検出であり、この機能については明らかにしえないが、現在の集落のありかたを参考にすると、高梁川分流に平行した東西に長い当時の集落の縁辺部を画したものではなかったかと思われる。この微高地の幅は南北200mほどと思われ、北の端は現在の総社市立図書館の南側あたりと想定される。真壁遺跡の弥生時代から古墳時代の遺構が比較的密に知られた現在の総社地域保健所東側からは、直線距離で500mほど離れているため、本来真壁遺跡と一体の集落であったかどうかは定かでない。また、今回出土した特殊壺類似の土器は、真壁遺跡からも出土していることは注意すべきである。

中世の遺構については、13世紀初頭ごろの時期と考えられる。この時期を前後する時期の遺構としては、真壁遺跡の上部に配石のある木棺墓や建物群などがいくらか知られているにとどまる。また、市内では備中国府推定地付近⁽³⁾で土壙が、窪木宮後遺跡⁽⁴⁾で井戸、また高梁川の支流である新本川を週った一倉遺跡⁽⁵⁾で井戸や木棺墓や建物が検出された例が知られる程度であるが、長期間にわたって遺跡の継続する例はこれまで知られていない。

溝-1・土壙-1については、下層の部分からまとめて遺物の出土をみた。また、本文中にすでに指摘したが、この溝-1・土壙-1から出土した土器に接合関係が認められたことは、この近接して存在した遺構に同時期に遺物の発見された可能性を示すものであろう。また、埋土からみるとこれらはある程度埋まつた段階で人为的に整地された可能性を想定しうる点にも注意が必要である。これらの土器の、とくに碗についてはすでにこの段階において祭祀用へと転化したものであるとする見解が示されており⁽⁶⁾、今回の土器の出土状況も祭祀の一環として置かれたものとみてよいのではないかと思われる。さらに遺物の器種構成からは、煮沸形態の鍋の類が乏しい点もそれを補強するものではなかろうか。

その他の中世の遺構は、土壙-1の埋土を切った柱穴の存在したことから、先後関係を想定できるが、あまり時期の幅は大きくなれないであろう。

今回の調査は、限られた範囲で、しかも洪水によって損なわれたところもあり、遺跡の全容を明らかにするには遠く及ばないものではあったが、市街化が急速に進む市の中心部近くの遺跡のあり方を知るうえで貴重な資料が得られた。今後、河道の想定される部分についても、その埋没する時期を明らかにすれば、変貌の著しい総社市街地の生い立ちについて、より具体的に明らかにすることが可能となるであろう。

註

- 註1 村上幸雄ほか「真壁遺跡」「総社市史」考古資料編 総社市 1987
- 註2 高畠知功・平井泰男ほか「橋本遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」65 岡山県教育委員会 1987
- 註3 村上幸雄ほか「備中國府跡緊急調査概要」「総社市埋蔵文化財発掘調査報告」7 総社市教育委員会 1989 P38-41
- 註4 谷山雅彦「(仮称)岡山県立大学進入路・排水路工事に伴う調査概要」「総社市埋蔵文化財調査年報」1 総社市教育委員会 1991
- 註5 高田明人「一倉遺跡」「総社市史」考古資料編 総社市 1987
- 註6 山本悦世「吉備南部地域における古代末～中世の土師器の展開」「中近世土器の基礎研究」Ⅶ 日本中世土器研究会 1992
鈴木康之「土師質土器の用途に関する研究ノート(1)」「草戸千軒」NO.197 草戸千軒町遺跡調査研究所 1989
鈴木康之「土師質土器の用途に関する研究ノート(2)」「草戸千軒」NO.198 草戸千軒町遺跡調査研究所 1989

第5節 石原後遺跡出土の土師器碗について

今回の調査では、縄文・弥生・古墳時代の土器とともに大量の中世土器が出土した。現在まで市内において調査された中世の遺跡の資料中では最もまとまった出土例である。

本稿では、これらの中世土器について、その出土の意味、特に土器の用途と性格、また、備中に於ける中世土器の変遷の中での本遺跡出土資料の位置などについて若干の考察を行いたい。また、今回の調査は面積が限定されていた事もあり、建物などの具体的な遺構は検出されておらず、土器が出土した遺構の広がりも不明である。この点についても土器の使用形態などから周辺に埋もれているであろう遺跡の本体部の性格について明らかにすることを試みたい。

まず、本遺跡から出土した中世土器の出土状態であるが、溝と土壙から出土した大量の碗と皿のうち、かなりの個体に接合関係が見られる。これは、他の場所で使用・破損した後にまとめて廃棄された可能性が考えられる。このため、土器は細片が大半を占め、出土量に較べて実測が可能な個体の点数は多くない。また、出土した中世土器の大半が、碗・皿などの供膳具で鍋・鉢・甕などの煮沸具・調理具・貯蔵具はほとんど見られない。このことは他の遺跡の出土例と較べると特異な傾向であり、本遺跡の性格の一端を表している。

次に土師器碗と皿について、その形態・技法・法量を詳細に検討してみたい。前述のように土器の出土状態からは時期差は認められず、少なくとも同時に廃棄されたことは、ほぼ確実であろう。それでは土器の中に生産・使用的時間差を認められるような特色は存在するであろうか。ここでは、最も量的・形態的に特徴を捉えやすい土師器碗を中心に考えてみたい。

土師器碗は、その諸々の特徴によりA・B・Cの3類に分けられる。

A類（64～81）は口径の平均が14.1cm、深さが平均3.9cmで、通常の土師器碗に見られる体部外面の指頭圧痕がないのが特色である。胎土は非常に緻密であるが、焼成は軟質でくすんだ黄白色を呈している。また、底部の器壁が比較的厚く、体部外面に緩いヨコナデの稜線が明瞭に見られる。これらA類の碗は他のB・C類とは、一見して区別することが可能であり、制作技法・工人等の違いが想定できる。

B類は淡灰色～白色を呈し、硬質の焼成で体部外面に指頭圧痕を明瞭に残すものが多い。口径の平均が14.7cmで、深さ4.2cmのものをB類（82～93）、深さ3.3cmのものをC類（94～111）とした。C類は、さらに口縁部が丸く肥厚する一群と、さほど肥厚しないものに分けられる。このように口径と焼成は似ているものの、深さが異なる個体が共存する例は、黑色土器碗では法量が最も分化する10世紀後半にはよく見られるが⁽¹⁾、白色の土師器碗では確認できていない。この組み合わせが意図的なものか単に生産工人の差によるものかは現時点では不明であり類例

の増加を待ちたい。

壺・皿について、まず壺は全体から見ると出土量は非常に少なく実測が可能なものは僅かである。焼成が白色と黄橙色のものに分けられるが、形態的にはさほど違いは認められず、底部は全てヘラ切り後の板状圧痕が見られる。皿は口径8cm前後で、焼成は白色か灰褐色もしくは黄橙色を呈し、底部がヘラ切り後未調整かナデを加えるか、または板状圧痕が見られるかによつて分類できるが、各々の特徴に相關的な関係は考えられない。ただ、実測が可能な3点(126・152・153)には白色と赤橙色の粘土を混ぜ合わせた「練り合わせ」状の胎土が見られるが、意図的なものか撒入品かは現時点では明確にしえない。

次に土師器碗について、まず最初に備中地域での成立と変遷について簡単に触れてみたい。從来、備中と備前南西部、備後の沿海部に分布する白色の土師器碗については「早島式土器碗」の呼称が用いられてきた。これに対し近年その分布域と系譜を重視した考え方から「吉備系土師器碗」の呼称が提唱されている。本稿ではこの名称を使用して論を進めたい。

「吉備系土師器碗」については、その祖型が黒色土器碗に求められることは、現在ほぼ定説になりつつある。⁽³⁾ その黒色土器が備中である程度まとまって出土しはじめるのは9世紀後半で、10世紀末には最も器種・法量が分化し、遺跡によっては出土する土器碗の大半を占める。この時期の土師器・黒色土器の碗は、基本的に施釉陶器の器形を模倣しており、器形の組成や法量分化にも強い影響が窺える。施釉陶器の模倣については、その原型たる縁釉・灰釉陶器がどの程度備中にもたらされていたかは不明であったが、最近、断片的な資料が確認されるようになり、各種の器形が明らかになりつつある。また、通常の回転台土師器の碗には「深碗」は見られず、黒色土器特有の器形であることから、「深碗」には光沢などの質感が特に重視されたと思われる。この傾向は11世紀前半に黒色処理を省略した「吉備系土師器碗」の初現期の資料にも受け継がれ、「深碗」型の白色碗には同様の緻密なヘラ磨きが施され、器面の内外に黒色土器と同様の光沢がみられる。ただ、備中ではこの過渡期の資料は備前に較べて非常に少なく不明な点が多い。⁽⁴⁾

これ以降の「吉備系土師器碗」と他の器種の組成の変遷は図21・22に提示したが、基本的に碗は法量の縮小化、ミガキの省略調整の粗雑化の方向を辿る。また、縮小化とともに規格化も進み、個体間のバラツキは顕著ではなくなる。そして高台の退化・消失を経て無高台ヘソ碗が現れ、若干の併存期間の後、ヘソ碗のみとなる。

以上の碗の変遷は量産化=土器碗の需要増大に対する回答であったことは指摘されているが、当然ながら、変化の過程は各地域で異なる。この違いは、備前と備中を較べれば、古代以来の土器生産体制と土器工人の性格の相違の反映であり、さらに細かく各地域の中でも地理的・經濟構造的な違いに要因を見いだすことができると考えられる。

次に「吉備系土師器椀」の技法的な特色について簡単にまとめてみたい。この椀の祖形が黒色土器碗に求められることは前述したが、成形技法も黒色土器を含む回転台成形の土師器に含まれると考えられている。これらの土師器については従来、様々な呼称が用いられてきたが、律令初期の畿内産土師器を模倣した丹塗り土師器と区別する意味から、近年「回転台土師器⁽⁵⁾」と呼ばれている。この土器は9世紀以降、備中と備前西部において、須恵器に代わって供膳具の大半を占める。器種は壺・皿が主体で、椀は黒色土器の占める割合が高い。

また、この時期の備前東部や美作のような須恵器生産優勢地域にも、このような須恵器の器形を模倣した酸化焰焼成の土師器は若干存在しているが底部の切り離しはすべてヘラ切りである。⁽⁶⁾これに対して、前述の2地域の「回転台土師器」はすべて「底部押圧技法」によって成形されているのが特色である。この技法は須恵器のような連続した回転ではなく非常に緩い回転で成形された後、外周にヘラを入れ切り離し中央部に押圧を加えるもので、通常の須恵器には見られない。⁽⁷⁾また、深い椀にはさらに押圧やヘラ状工具によるナデ・ヘラ削り等を加えて体部の丸みを意識している。この成形技法は黒色土器が11世紀に「吉備系土師器椀」に転化しても質的な外見とともに基本的には受け継がれていると考えられる。ただ、「吉備系土師器椀」は定型化して生産量が急速に増大する12世紀になると、法量の縮小化、ヘラミガキ等の調整の省略が進む。⁽⁸⁾また、縮小化に伴い原型をさほど深く成形しないため、指頭圧痕が顕著に残り、器面に亀裂を残したままになり、体部の丸みも次第に失われていく。この傾向の原因については、土器に対する実用的な食器としての用途が失われ、別の目的に対応するための大量生産、即ち祭器としての性格への変化が考えられている。⁽⁹⁾この場合、代わりの実用的な食器が何であったかについては不明な点が多く、すべてが木器に交替したと想定できるほどの出土例が現時点では確認されておらず、詳細は不明である。

以上、「吉備系土師器椀」の変遷と技法的系譜について概観したが、その出現の意義については、備中地域の古代的な土器様式と中世的土器様式という観点からすると大きなものがある。つまり、律令制における土器様式は、古代後期に政治制度の変質によりかなりの器種の交替が見られるが、基本的には政治制度を反映した階層的な所有形態を示す。それは、施釉陶器や黒色土器が一般の集落からはほとんど出土しないことに現れており、器形についても、椀や高台付皿などは、やはり特別な限定された需要が想定できよう。

これに対して「吉備系土師器椀」成立以降は、まず器形が「深椀」と壺・皿に整理されるとともに、量の多少を無視すれば同じ土器が遺跡の性格を問わず出土する。また輸入陶磁器も少量でも、ほとんどの一般農村集落からも出土するようになる。そして、同時期に瀬戸内沿岸各地に同様の白色の土師器碗が成立する事とあわせて「吉備系土師器椀」の出現・定型化をもって備中の中世的土器様式が完成したと考えられている。

次に「吉備系土師器椀」の流通についてであるが、今回の石原後遺跡出土の資料中には、法量・焼成・成形技法などで、最低三つの群がみられた。従来このような法量差は時期差と捉えられてきたが、今回の出土状況からは時間差は見いだし難く、土師器椀のような破損率が高い消耗品に伝世は考え難い。この場合、その差は製作工人（組織）の違いと見るのが妥当であり、一度に大量の需要が生じて、複数の供給先から土器椀が集められた可能性が考えられる。「吉備系土師器椀」の生産と流通については、近似する土師器椀の沖の店1号窯などの例から、非常に在地性の強い小規模な生産と、自給的な限られた範囲が想定されている。⁽¹¹⁾しかし、今回取り上げたA類の椀は、河川水系の異なる約10km隔たった遺跡からも出土しており、比較的広い流通をもつ椀も存在することは注目できる。このような在地の中での土器の動きについては、中世的な視点で、椀だけでなく皿や鍋も含めて検討が必要であろう。

最後に土器椀の年代と出土の意義であるが、今回の資料を含めて岡山県下では実年代を特定できる文字資料などとの共伴例は非常に少ない。そのため、必然的に法量の推移による相対的な編年によるしかなく、図21によると助三畠遺跡出土の資料のやや後ろに位置づけられる。実年代としては、13世紀前半の鎌倉時代の初頃と考えられよう。

また、本遺跡と同様の土師器椀の出土状況が見られる市内の遺跡としては御所遺跡のS K-003があり、その性格としては古代末から中世の政治的拠点と考えられている。⁽¹⁴⁾

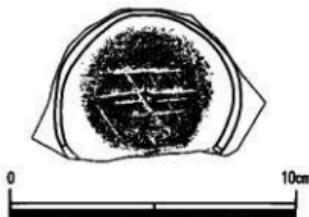
このような、土器の大量廃棄は当時の文化・政治の中心である京や鎌倉の遺跡によく見られる現象であることは指摘されている。同様に地方においても、規模は小さいがやはり地域の拠点的な遺跡、即ち莊園領主などの富豪層の館等に見られる傾向にあり、石原後遺跡の場合も同様の性格が想定できよう。ただ、「吉備系土師器椀」はさらに時期が降るにともなって縮小、粗雑化が進行するとともに、よりまとまって出土する量が増大する傾向があり、所有層の拡大、意識の変化等を窺うことができる。

（武田）

註

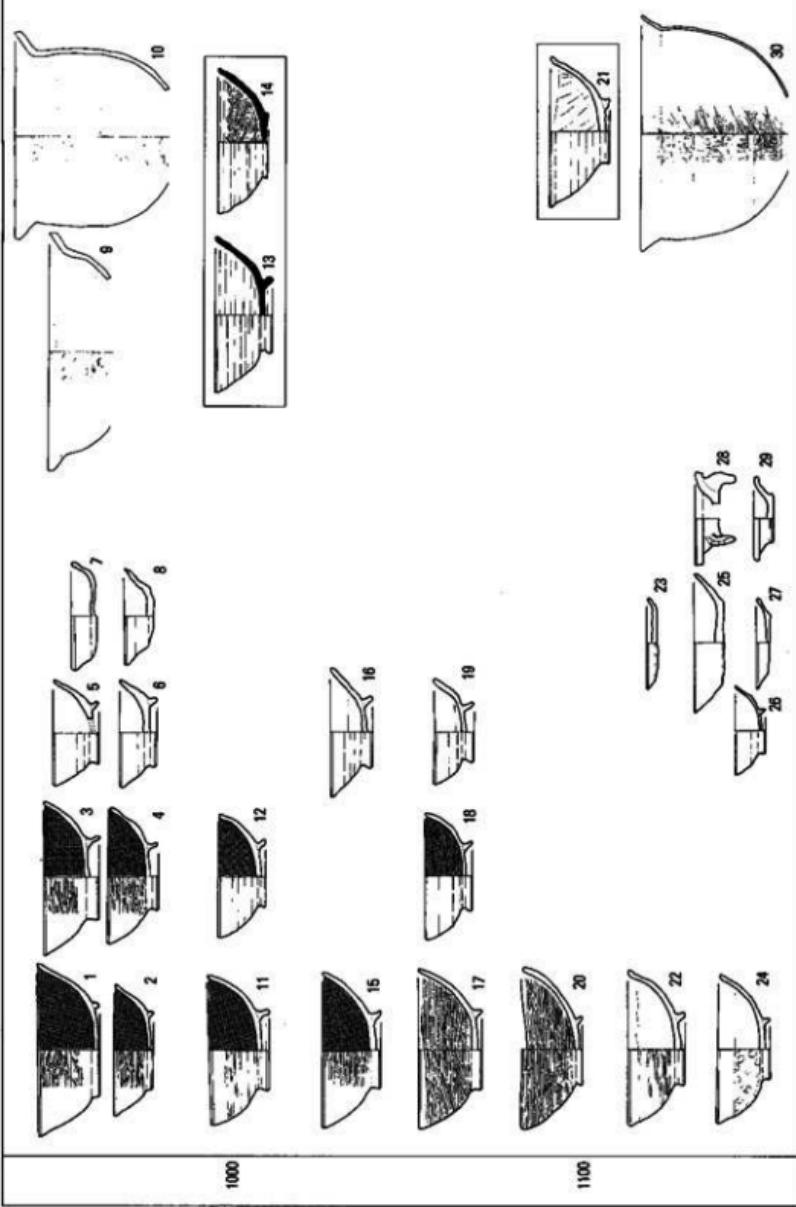
- 註1 武田恭彰「岡山県に於ける回転台土師器の成立と変遷」『中近世土器の基礎研究』X 日本中世土器研究会1994
- 註2 1990年頃から橋本久和・森隆氏によって提唱されはじめた。系譜論、地域論の視点にたてば、現時点では最も有効な呼称と考えられる。
- 註3 註1と同じ
- 註4 備中では備前の鹿田遺跡の様に一つの古代・中世遺跡を継続して調査した例が無く、今後、資料が纏まって出土する可能性は十分考えられる。
- 註5 註1と同じ

- 註6 岡山市の百間川・米田遺跡や勝央町平遺跡などから少量ながら出土している。備中のものに比べてヨコナデが整美で、回転ヘラ削りを施すなど須恵器の影響が強い。
- 註7 註1他この技法については、はっきりとした系譜や初現について不明な点もあり、今後の資料の増加に期待したい。
- 註8 例的に、備前西部の鎧錦場窯址群で8世紀後半から9世紀初頭にかけて、この技法をもちいた須恵器が生産されている。
- 註9 P23 註6と同じ
- 註10 特に、施釉陶器が出土する場合、黒色土器が併存する場合が大半である。また、一般の集落、墓からは土師器の壺、皿のみが多く、黒色土器も少量伴う例もあるが、器形の組み合わせが見られない。
- 註11 「山陽自動車道建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42 岡山県教育委員会1988
沖の店1号窯の土師器碗は、外見では吉備系土師器碗に酷似しているが、底部が回転糸切りであることや、体部に二次的に押圧を加えない点など、異なる系譜が想定出来よう。
- 註12 総社市教育委員会が1995年2月に調査を行った高砂遺跡SE01から出土している。
- 註13 馬場昌一 「助三畠遺跡」『貿易陶磁研究』日本貿易陶磁研究会 1985
山本悦世 「吉備南部地域における古代末から中世の土器様相について」『中近世土器の基礎研究』
日本中世土器研究会 1992
- 註14 本書P23註3を参照

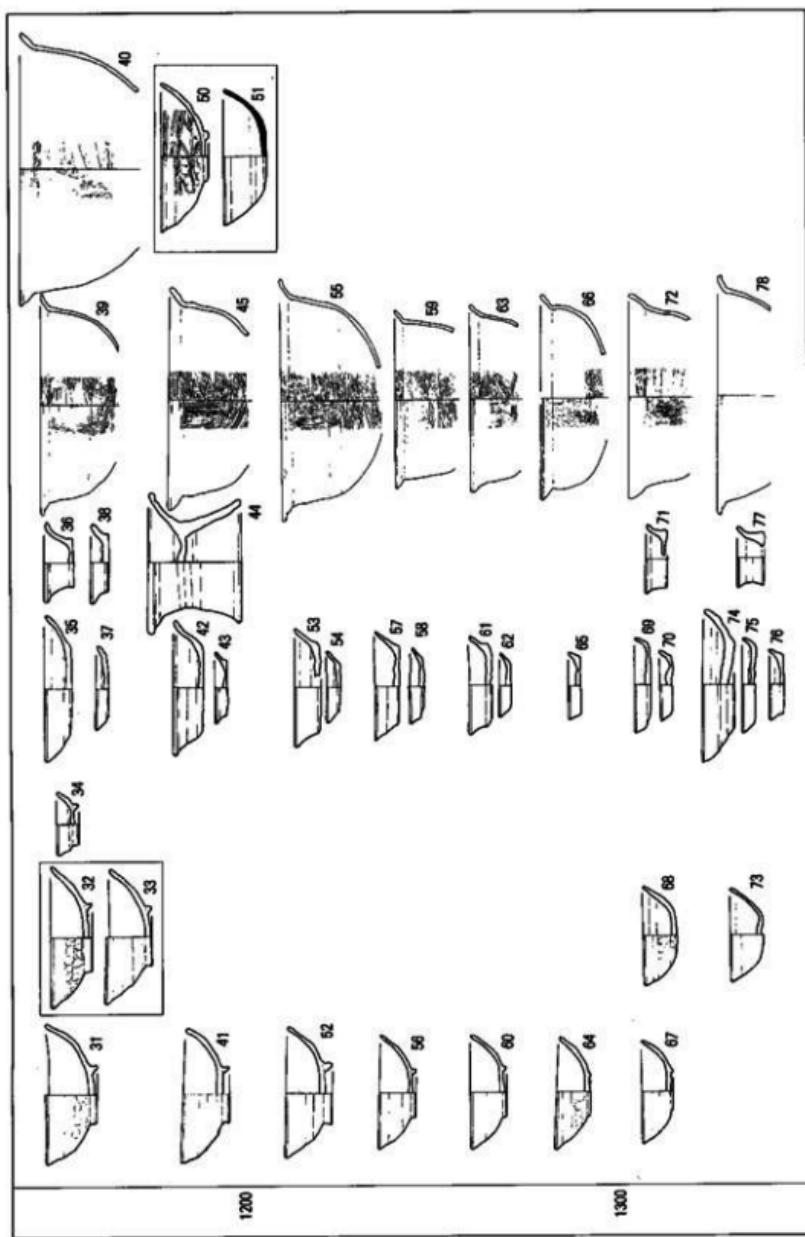


第20図 土師器碗底部拓本 (S=1/2)

第21図 備中南部土師器編年試案(供器は $\frac{1}{6}$ 、焼器は $\frac{1}{10}$)



第22図 懿中南部土師器年試案（供膳具は $\frac{1}{6}$ 、煮沸具は $\frac{1}{10}$ ）



120

130



1. 石原後遺跡近景（調査前・南から）



2. 石原後遺跡近景（調査後・南から）

図版 2



1. 調査区全景（北西から）



2. 調査区全景（北東から）



1. 溝一4 遺物出土状況（南から）

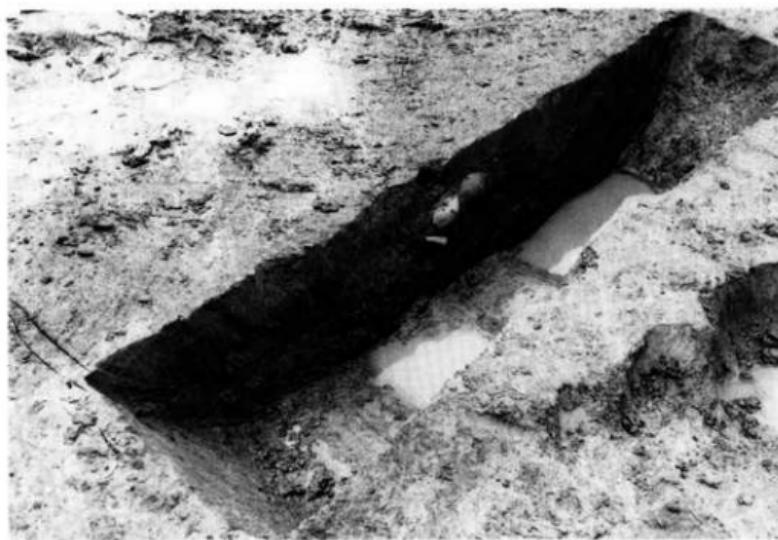


2. 柱穴列等検出状況（北から）

図版 4



1. 溝-5 遺物出土状況（東から）



2. 溝-5 土層断面



1. 溝-1 遺物出土状況（東から）



2. 溝-1 土層断面

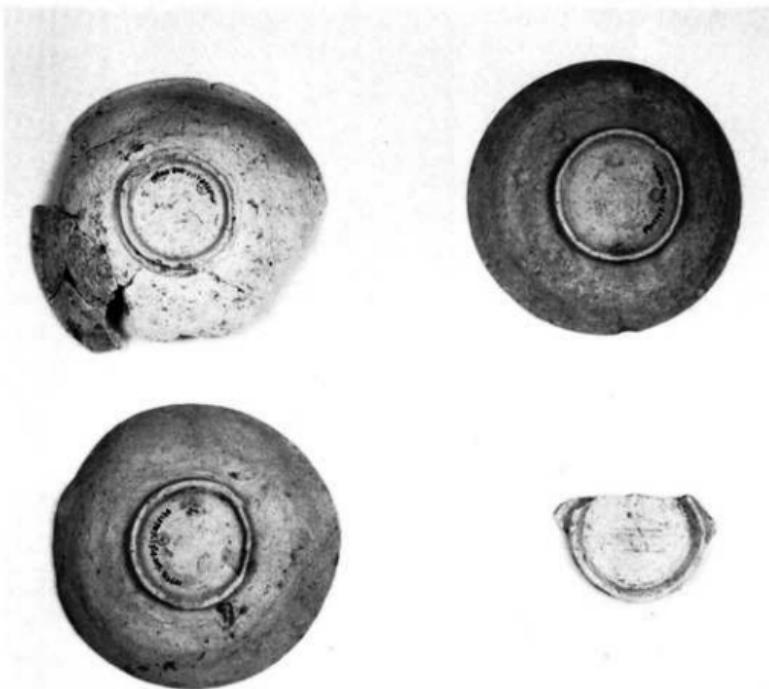
図版 6



1. 土壌-1 検出状況（北西から）

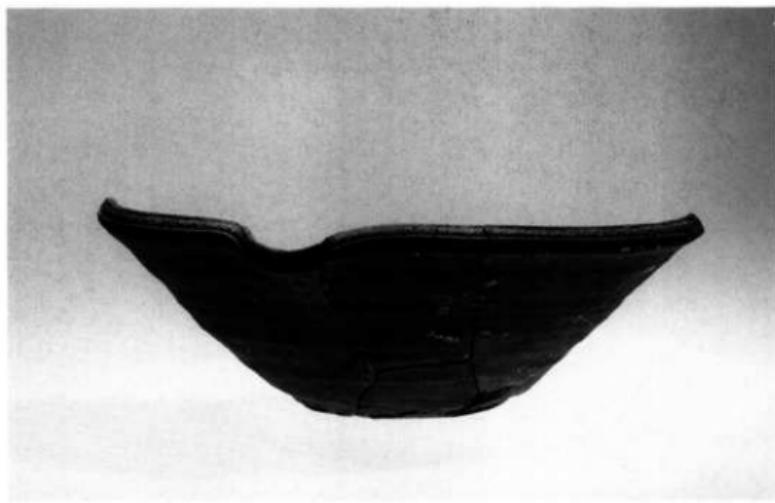
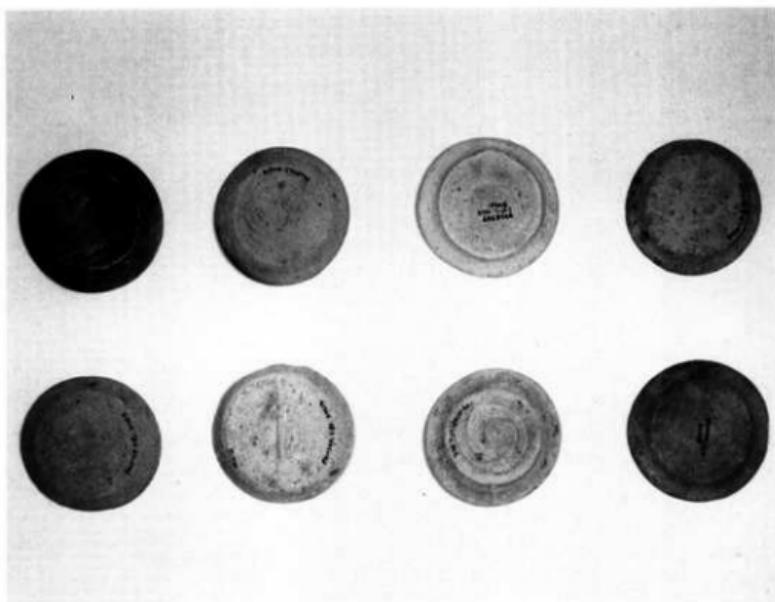


2. 土壌-1 遺物出土状況（北から）



中世出土遺物 1

図版 8



中世出土遺物 2

報告書抄録

ふりがな	いしらうしろいせき						
書名	石原後遺跡						
副書名							
卷次							
シリーズ名	総社市埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	第14集						
編著者名	高田明人 武田恭彰 平井典子						
編集機関	総社市教育委員会						
所在地	〒719-11 岡山県総社市中央一丁目1番1号 TEL 0866-92-8363 FAX 0866-92-8397						
発行年月日	西暦1995年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
いしらうしろいせき 石原後遺跡	おかやまけん 岡山県 そうじゅし 総社市 みぞぐち 溝口			34° 35' 5"	133° 44' 52"	19910611 ~ 19910713	300m ² 文化筋公園 建設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
石原後遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 中世	溝 溝 溝 土壤 柱穴	1 1 4 3 3	弥生土器 土師器 土師器 陶磁器		

總社市埋蔵文化財発掘調査報告 14

石原後遺跡

1995年3月 印刷

1995年3月 発行

編集発行 総社市教育委員会
総社市中央一丁目1番1号

印刷 柳本印刷株式会社
総社市総社一丁目10番24号

